

始めは、駅前の雑居ビルの一フロアだった。

「開発二課の事故処理についての報告書が出るまでは動かさないのが賢明と、灰原部長のお話はお聞きでない、と？」

「…そんなことは言っていない」

それが都心の複合ビルの四階から十階までに成り上がった。

赤司が自分で大きくしたわけではない、この地位は一フロアから広くなり、セキユリテイのしっかりしたビルに移るまで成長した会社の代わりに与えられたものだ。どこか子供が大事にする毛布を取り上げるのと似ている。十分でしよう、あなたにはもうそれは小さく、身の丈に合うだけの用を為さなくなっているのだから、と。傷だらけになりながらも守り、育てた会社を信用のある人物に任せられたのはいいし、手放したのも正解だったとは思いますが、寄越されると自分の居場所はなかなかに作りにくいものだ。自分の身の丈に合っているのかどうかは別として、ここで成果を出さなければ発言など出来ないだろう。赤司は窓の外に目を向ける、空気が汚染のせい、無愛想な風景はぼんやりと濁って見えた。

「……」

「心にもないよ」

胸襟とばかりに手を開いてみせる。相手はちらと赤司の目を見、手元に視線を落としながら続けた。

「…そうですね。実測先生が来るまで時間がありますね。ちょうど稟議書も回ってきてますし、さくつと片付けておいて下さい。私はしばらくの間、隣で打ち合わせしていただきますので」

とん、とタブレットをタッチして頭を下げると、踵を返す。

「ちよ、テ…黒子、せめて茶くらい飲んでいってよ」

相手はぐるりと振り向くと爽やかな声で

「バカいわないで下さい。この忙しいときに、社長が研修日程を早めたものだから調整が大変なんです。工場から何からてんやわんやです」

と、無情に言った。

「それは仕方ないだろう、社運がかかるかも知れないんだからテストは見たいに決まっている」

わかる、よく分かります、という風に頷く。も、無表情だ。

「ですから、これから広報室長と、一課と三課に掛け合ってラインの見直しと入れ換えを検討するんです。営業の方は社長からの方が通りがいいですからお願いします」

ドアがノックされて社長室秘書の声が掛かる。

「社長。K物産からのアポイントメントが」

「あ、はい」

呼びかけは赤司に、であるのに黒子が代わりに応える。タブレットを持ち上げ、赤司から離れていく。

「くろ…」

「いいですか、同行は専務と秘書です。食事時間もきちんと取って下さい。社長室の女性たちを泣かせないように」

聞き取りやすいやさしい声にも関わらず台詞はその欠片もない。

「じい…」

たまには昼食を、せめて茶も一緒にどうだろうか。

「はたん。」

赤司はしばらく沈黙してから窓の外を見遣る、鳥が横切り、空色は滲むように見えた。

「茶ぐらいいいだろう」

呟いたところに湯飲みを盆に載せた秘書が入ってきた。一緒に実測も入ってくる、彼はパラリーガルからのし上がって、いまや大手ファームの敏腕弁護士だ。ここに来るはずではなかったと言いながらもきっちり赤司の会社の顧問弁護を担当してくれている。

「書類は後でお持ち致します」

「ああ」

「ありがとうございます。お子さんは元気？」

秘書の長家はにっこりと微笑んで応える、産休中に顔見せにやってきては黒子が抱き癖をつけるほどに彼女の子を抱いていたのは去年のことだ。赤司はやきもきするやら、どうかして事を為さねばならぬと考えたものだ。黒子は赤子かわいさゆえか、出産後に発覚した彼女の夫のモラルハラスメント問題に頭を突っ込み、現在は社内の休憩室と喫煙室の改善にむけて各部署と折衝している。しかも本来の業務外のところで、だ。そのため、赤司よりも忙しい。

「早く着いちゃったわ」

実測もひとまずというようにソファに座ると、落ち着くこともなくすぐさま鞆を開いてファイルを取り出した。

「で、とりあえず事故についてこちらも調べてみたの。労務の方は…」

誰も彼も分かっていることだが忙しい、忙しいのはいいことだ。なのにとこか釈然としない。

「……」

「何よ征ちゃん、変な顔して」

「普通だ」

「黒子君が入ってからほんと分かりやすい表情見せるようになって。社長も形無しだよ」

ファイルを閉じてせせら笑う。こういうとき実測は、弁護士の顔ではなく、高校時代の先輩の顔になる、約束よりも早かった時間ぶん、赤司の愚痴を聞いてやるというようだった。

「喧嘩でもしたの？」

茶托に置かれている茶を啜る。赤司も同じように茶を飲む、工場長が送ってくるものだが、いい味だ。黒子に手ずから淹れてやりたかった。

「……。同じ階なのにほとんど顔を見ない」

「黒子君不足？ 軽いもんじゃない」

「思いつきで社内環境プロジェクトなんてやらなきゃよかったと思ってる」

「誰かの腸内環境とも違うんだから真面目な顔で言わないでくれる？ 立て直し中なんだし、部署間の軋轢なんてない方がいいじゃ

ない」

「新旧体制の両立と維持は、こちらとしても頭が痛い」

数を示すことは簡単だ、しかし、それとは別に会社をそれこそ赤司が生きる以上ぶん働いて業績に貢献し続けてくれた社員と新しく柔らかな思想を持った若手社員、そしてその間にいる堅実な中堅の社員、彼らの社会的な自尊心を守るための環境作りは気を遣う。赤司は、つまりは、学生時代に興じた小さな会社が成果を出して、それを及第点として、親が傘下におくところの系列会社を任せられたというわけだ。まずやらされたのはリストラだ。手始めに現状の把握、データの見直し、赤司に好意的な幹部であろうが、退いていただいた、それから組織の改革。いきなりな好転などあちらも期待してはいないだろうが、社員を守ることは会社の利益に繋がる、内外でしなければならぬことは山ほどあった。

「ワークシェアリングの面でも、よ。征ちゃんのところもつと女性の働きやすい環境にしたいところね」

実測は法人民事を担当するので、社内の小さな採め事も処理する。個人のモラルハラスメント問題から提携契約まで世話になっている。ついこの間も一人の男性社員が退職した。工場事故の關係者と覚しいその社員は、妻子を残して行方不明となり、喫煙室や食堂にはまだその噂話が残っている。

「それにしたって」

「はいはい。仲が良くて何よりだわ」

胸まで上げた手を揺らす。押し寄せる波をそっと押さえるかのよう。

「いいじゃない、やらせておきなさいよ」

他人事である、そりゃそうだ。実測にとつてはクライアントの利益を守るのが第一で、安泰ならばそれに越したことはないからである。赤司の不満だつて些細なものにしかならない。

「ほんと子供みたいなんだから」

「嫌みか」

「それくらいの方が社内ではウケがいいってこと」

つまらないところで敵を作らないでね、と笑顔で続けられる。外部から持ち込まれることはともかく、内部でのいざござは最悪でも赤司まで収まらせ、拗らせて実測まで持つてこないようにと釘を刺しているのだ。そこはご多忙な弁護士様らしい。

「とりあえず、いくつかはそちらに回らずに収束した」

「あら」

「黒子はフロア内の移動も少ないし、ほとんど知られていないのに、やる事が手堅くて舌を巻く」

「苦勞したぶん、いい仕事してるんじゃない」褒めたら？

どうだと恋人を自慢したいところではあるが、赤司の心中は複雑だった。

黒子は総務部、経営管理室に派遣された人間だ。経営管理室は、総務部ではあるが社長室と並んでセクションとして独立しているようなところがある。というか、組織の改変にあたり、外商、知財部門と統合して新たに立ち上がった若い部門である。既存特許の管理に始まり、営業やら開発部、また経理と密接にリンクして経営全体の流れを見る、いわばリスク管理の処理担当だ。と言え